

社会とのかかわり



地域社会とともに

JR東日本では「ステーションルネッサンス」として、地域の顔である駅に賑わいを創出し、地元への集客効果を高めるなど、地域社会への貢献に取り組んでいます。例えば、立川駅においてはバリアフリー設備の拡充等を行い、よりご利用いただきやすい駅にするとともに、新たな商業スペース「ecute立川」「ホテルメッツ立川」をつくりました。

また、東京駅では、八重洲側において「グラントウキョウノースタワー/サウスタワー」「グランルーフ」を展開しており（「グラントウキョウノースタワーⅡ期」は2012年8月末、「グランルーフ」は2013年秋完成予定）、丸の内側において駅舎の保存・復原を進めています。駅構内には商業ゾーン「グランスタ」等を展開しており、これらを合わせて「東京駅が、街になる」をコンセプトに「東京ステーションシティ」と名づけ、首都東京の玄関口にふさわしい、新しい文化の発信地としてのまちづくりをめざしています。

さらに、地方自治体等からの要望に基づき、まちづくりにあわせた新駅設置、自由通路設置等に伴う駅舎整備を自治体と協力して進めています。2010年度には駅周辺の整備計画にあわせ、成田線佐原駅にコミュニティーセンター（自治体施設）を併設し、駅舎整備を行いました。その結果、1987年の会社発足より自治体施設を併設した駅は、81駅（2011年3月31日現在）になりました。また、常磐線日立駅、東北本線雀宮駅等では自由通路設置に伴う駅舎整備を行いました。



佐原駅



日立駅

■鉄道の立体交差化

交通渋滞の解消、鉄道・道路それぞれの安全性の向上を図るとともに、鉄道により隔てられている街の一体的な発展を図るため、沿線自治体により計画・実施されている立体交差事業に当社も協力しています。

中央線では、踏切廃止による交通渋滞の解消、街の一体化を図るため、三鷹駅～立川駅間において連続立体交差事業を事業主体である東京都と協力し進めています。事業前は当区間(延長約13.1km)に踏切が18箇所ありましたが、2010年11月に全区間を高架化し、すべての踏切が廃止されました。



立体交差

地域再発見プロジェクト

■「地域再発見プロジェクト」の展開

JR東日本グループと地域が役割を明確にしながら共に知恵を絞る「共創」戦略のもと、人とモノの交流を図ることで首都圏と地域の間で大きな循環を生み出し、インバウンドも見据えた新たなマーケットを創造することをめざす「地域再発見プロジェクト」を推進しています。

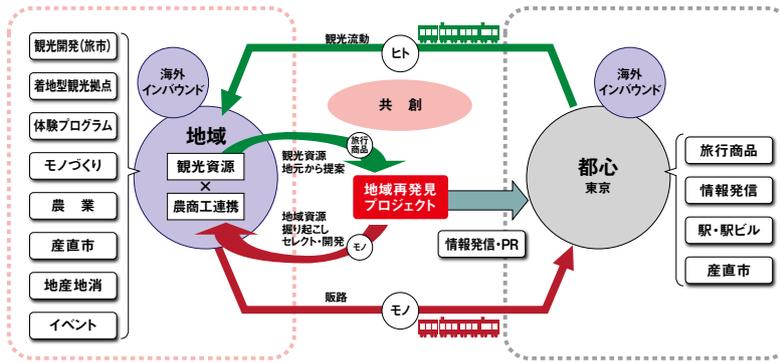
「地域再発見プロジェクト」では、JR東日本グループが有する、地域と地域を結ぶ鉄道ネットワークや、地域の拠点としての駅、幅広い事業ノウハウや首都圏を中心とした販路・広告媒体、地域の一員としての人材といった強みを活かしながら、伝統文化・祭り、伝統技術、地域商品といった有形無形の観光資源の発掘と、販路の拡大、首都圏と地域の双方向での情報発信を推進しています。

2009年度には、岩手エリア、館山エリア、越後湯沢エリアの長期滞在型ホテルや駅構内において、地域の特色を活かした開発やリニューアルを行い、地域の方々との連携を深めながら地域活性化に取り組んできました。また、2010年度には、東北新幹線新青森開業にあわせ、青森市のまちづくり構想と連携し、青森駅前の青森ウォーターフロントエリアに日本一の生産量を誇る青森県産りんごをシールド等に加工する「工房」と青森県の農産物等を販売する「市場」の複合施設「A-FACTORY」を開業しました。あわせて、まだ知られていない観光資源を地元の方々が提案し、お客さまをご案内する旅行商品「旅市」と連動した青森の新たな魅力を提案しています。

首都圏における取り組みでは、地域の魅力や情報の発信による観光流動の創出を目的とし、デスティネーションキャンペーン等の営業施策と連動した産直市を上野駅等において開催しています。産直市では販売にあわせた観光PR・イベントの開催や、当社のデジタルサイネージ等の交通媒体等を活用し、地域の方々と連携した情報発信に取り組んでいます。

今後も、地域の行政・団体・生産者等をはじめ、学校や企業等も含めた地元の力を活用しながら、持続的に地域活性化の取り組みを推進していきます。

■地域再発見プロジェクト



A-FACTORY



旅行商品「旅市」

子育て支援

■子育て支援施設 ～“子育てをしながら働く”を応援～

地域社会と連携した街づくりの一環として、駅から概ね5分のアクセスの良い立地を中心に「駅型保育園」等の子育て支援施設の開設を進め「仕事」と「子育て」の両立を応援しています。1996年から開設した子育て支援施設は累計で54箇所(2011年4月現在)に達しており、今後もさらなる拡大をめざしています。「駅型保育園」では通勤途中に送迎ができるメリットに加え、父親と登園する子どもも多く見られ、当社の取り組みは男性の育児参加の支援にもつながっています。今後も子育てにまつわるさまざまなニーズに対応し、保育園に限らず、駅立地を生かした「送迎保育ステーション」や「駅型学童」、さらに就労の有無に関係なくすべての子育てしている方を対象とした「親子コミュニティカフェ」等の保育サービスにも取り組みの枠を広げて、地域社会への貢献・沿線価値の向上に積極的に取り組んでいきます。



新幹線と駅型保育園



駅ビルの屋上庭園で遊ぶ園児たち

■外出支援応援「リフレスタ」

横浜駅改札内にある「リフレスタ」は、「ベビー休憩室」「メイクアップラウンジ」「カフェ」が一体となった施設です。ベビー休憩室では、おむつ交換台や授乳室のほか、子どもトイレも用意して、小さなお子さまをお連れのお客さまなどの外出をサポートしています。



リフレスタ

文化

■鉄道文化財団

JR東日本の経営資源を継続的に社会貢献活動に役立てるため、1992年に財団法人東日本鉄道文化財団を設立し、鉄道を通じた地域文化の振興、鉄道に関する調査・研究の促進、鉄道にかかわる国際文化交流の推進等に取り組んでいます。主な活動内容は、鉄道博物館や旧新橋停車場の運営、地方文化事業支援、アジア各国の鉄道事業者の研修受け入れなどであり、ホームページ(<http://www.ejrccf.or.jp/>)等で情報発信を行っています。なお2010年4月には公益財団法人となりました。

■鉄道博物館

①鉄道にかかわる遺産・資料の調査研究を体系的に行う「鉄道博物館」、②実物を中心とした展示により鉄道の歴史を語る「歴史博物館」、③鉄道の原理・仕組みや技術について体験的に学習できる「教育博物館」、の3点をコンセプトに2007年に埼玉県さいたま市にオープン。以来、多くのお客さま(2010年度は約82万人)にご来館いただいています。2011年4月には「てっぱく広場」をオープンするなど、展示物・施設の充実を図っています。



2007年10月14日(鉄道の日)にオープンした「鉄道博物館」(さいたま市大宮区)

次代の担い手とともに

■鉄道少年団

公益財団法人交通道德協会が運営する「鉄道少年団」では、青少年へ向けた交通道德の高揚を目的に、管内12支部約500名の団員が多彩な活動を行っています。これをサポートするJR東日本は、各支社に事務局を設置し、駅の清掃活動や各種鉄道施設の見学といった活動の場を提供し、次世代の交通道德の向上に資するよう、積極的な支援を続けていきます。

■出前授業による環境教育の展開

JR東日本では、持続可能な社会づくりに貢献するため、次代を担う子どもたちに対し、「環境問題」や「社会とのつながり」を理解してもらうための環境教育プログラムを2009年度からスタートさせました。同プログラムは「情報化と環境」を理解してもらうプログラムで、今後も継続した展開を行っていく予定です。



東京都の小学校で出前授業を実施

■鉄道博物館にて環境講座を実施

2011年7月、鉄道博物館において、小学生を対象とした、「環境にやさしい鉄道講座」を開設しました。

当日は、当社の環境への取り組みを通じて、地球が抱える環境問題を幅広く理解してもらう講座や、駅や車内のゴミの分別体験でリサイクルの大切さを学んでいただきました。



鉄道博物館で実施した「環境にやさしい鉄道講座」

国際

■国際協力

JR東日本では、国土交通省等の要請に基づき、アジアの国々へ鉄道専門家を派遣し、培ってきた技術やノウハウを紹介したり、国際協力機構（JICA）等の依頼に基づき、開発途上国から研修生を受け入れて専門分野の講義等を行ったりするなど、国際協力の取り組みを展開しています。

また、JR東日本は海外の鉄道関係者からの視察等も積極的に受け入れており、2010年度は60カ国、746名の海外からの視察・訪問を受け、国営鉄道の民営化手法、新幹線やSuicaに代表される先端技術、さらには地球環境保護、生活サービス事業に関する現場視察や情報提供を行いました。



新幹線車両メンテナンスの視察
(新幹線総合車両センター)



ハイブリッド車両「こうみ」の視察
(小海線営業所)

■国際機関を通じた世界への貢献

JR東日本は、加盟するUIC（国際鉄道連合）やUITP（国際公共交通連合）、AAR（米国鉄道協会）、APTA（米国公共交通協会）等の鉄道国際機関が主催する国際会議や発行する出版物等を通じて、積極的に情報収集・発信を行っているほか、世界の鉄道の発展にかかわるさまざまな課題の解決に積極的に取り組んでいます。近年は、これらの鉄道国際機関の国際会議を日本で主催したり、日本の鉄道技術を紹介するスタディーツアーを実施するなど、鉄道事業のグローバルな振興・発展に寄与すべく努めています。

2009年4月からは石田副会長がUIC会長を務めており、これからも鉄道国際機関の活動を通して、日本のみならず世界の鉄道の発展に貢献してまいります。



UIC総会でスピーチをする
石田副会長（2010年北京）



国際踏切シンポジウム（2010年東京）